

森とともに生きて



吉野林業の歴史がよくわかるシリーズ

江戸時代 植林の広がり と 林業の発展

谷 瀬兵衛 (林業経済史研究者)

大開墾・人口爆発の時代

一六〇一七世紀は大開墾・人口爆発の時代といわれます。この時代に、新田の開発が進み、人口が爆発的に増加しました。人口歴史学者の計算によりますと、一六〇〇年頃の人口は約八〇〇万人から一〇〇〇万人、一七二一年の幕府調査では約二六〇〇万人、一七二〇年間に三倍前後の増加率となります。

人口が増加すると、家屋の建築が増え、材木需要が増加します。これがインセンティブ（誘因）となって、一七世紀には植林が吉野川流域の各郷にも広がりました。

植林の広がり

最初、植林は各百姓が所有する山畑（焼畑）からはじまりました。それまでは、山のゆるやかな斜面に開けた山畑で、楮や漆などの工芸作物、芋や豆、牛蒡など

の作物を栽培していました。しかし、材木が売れだすと、山畑に杉や松を植えるようになりまし。伐採まで少々年数がかりますが、あまり手間がかからず、収入も良いからです。その頃は大径木ではなく、中小径木の生産が主でしたから、植林して二〇から三〇年くらいで伐採しました。これを植え付けといいます。

材木需要がさらに発展しますと、自分の所有地から村山へ広げるようになりまし。これを植え出しといいます。村はこれを規制しようとし、村と百姓とのあいだでもめごとが起こります。村山は、村全体の山であり、建築用材や薪炭、わらびやキノコなどの山菜、家畜のえさ、田畑の肥草など、村人の生活と生産とになくしてはならないものですから、個人が私有地に囲い込むことは許されないので当然です。

しかし、植え出しは止まりませんでした。それほど植林にたいするインセンティブが強かったのです。もはや村では止められない流れになっていきました。そうになると、村は植林を認め、林業を村の主

産業にする方に転換します。

伐採した時の利益を、村が二〜三割、百姓が八〜七割という分収契約を結んで、村山に植林をさせることもありまし。これを植え分けといいます。

さらに、村山を各百姓に平等に分割して、各自に植林させることもありまし。私は、これを村山分割と呼んでいます。

享保の頃（一七一六〜一七三五）に書かれた本の中に、「川上郷のあたりは吉野杉が名物で、山の上まで杉が植えられている」とあります。

百姓の身の丈に合った林業

吉野林業は、幕府や藩が主導した林業ではなく、地元の百姓が自らの力で作り上げた林業です。山中の百姓は零細な百姓ですから、彼らの営む林業は狭い山地对象にした小規模なものでした。だから、いまでも一筆の山地（林分）は小さいのです。川上村白屋の土地台帳を見ますと、一町歩以上の山地はわずか二%、一反未満の山地が七〇%を超え、平均面積が一反五畝余です。小さい山地がジグソーパズルのように分布しています。九州や東北地方のような一山全体を一つの林分としたような林業ではありません。

ところが、享保時代に、吉野でも樽丸の生産が始まりました。樽丸とは、酒樽の側板や底板です。灘の清酒を吉野杉の酒樽につめ、樽廻船で江戸へ輸送しまし



〔写真説明〕樹齢400年といわれる最古の植林山。川上村下多古にある「歴史の証人」の森。（川上村役場提供）

た。輸送中に杉の木香が酒と混じり、芳醇な清酒になり、江戸町民の評判を得まし。これによって吉野材は優良材としての評価をいっそう高めました。

樽丸は八〇〜一〇〇年生の杉から生産します。伐期が長くなりました。その間は、小規模な間伐を何回も行なって、維持費用を賄いました。吉野林業のシステムを、密植・多間伐・長伐期といいますが、私は、それに小区画をかぶせています。

吉野林業の評判

吉野林業の評判は、元禄時代（一六八八〜一七〇三）には全国に広がっていました。宮崎安貞が著した『農業全書』に、杉の仕立て方の説明がありますが、明らかに吉野を念頭において書かれています。

また、天保の頃（一八三〇〜一八四四）に書かれた大蔵永常の『広益

吉野材は、吉野川・紀ノ川を利用して和歌山に流送し、和歌山から船で大坂に回送しました。また、樽丸や割り物など加工材は筏の上荷として輸送されました。いくら吉野川の水量が多いと言っても、そのままでは筏を流せません。溜堰で川をせき止め、それを抜き、水勢を利用して筏を流しました。浅いところは川をさらえ、川中に横たわる岩を割ったり、さまざまなインフラを施しました。これらは主に材木商人の同業組合である材木方が行いました。筏流しに従事する筏士は専門職で、最盛期には数百人もいました。

筏流し

丸が一五%、これが吉野林業の主要生産物でした。

安政4年の吉野材の移出量 (出典) 黒滝村寺戸 田野家文書

製品種類	数量	金額
杉丸太	51,000床	5,600貫
内和歌山売り	30,000床	3,000貫
大坂売り	21,000床	2,600貫
樽丸	70,000丸	1,000貫
杉丸太	3,210束	136貫
杉小丸太	1,700束	20貫
杉一間割物(二つ割)	3,200挺	17貫600目
杉一間割物(四つ割)	4,800挺	14貫400目
杉皮	1,000束	3貫250目
陸荷 杉小丸太	1,400束	2貫450目
陸荷 杉小角	3,000本	18貫
陸荷 杉桧板	3,000束	24貫
陸荷 杉皮	400束	4貫400目
合計		6,840貫100目

〔注〕
1、各数字には「凡」がついているが、本表でははし。2、床は筏の基準。上流では1床は幅4尺、長さは木の長さ。これを10数床連結して流した。これを上床という。中流から2床を横に連結して流した。これを下床という。本表は下床で表記されている。